源氏物語みちしるべ

中野幸一

中野幸一（なかの・こういち）

1932年、神奈川県生まれ。1961年、早稲田大学大学院文学研究科博士課程修了。平安文学専攻。現在、早稲田大学教授。文学博士。

主要編著書

『源氏物語古註釈叢刊』（10巻、既刊5冊）『源氏物語資料影印集成』（12巻）『源氏物語講座』（10巻、共編）『源氏物語』（新潮古典文学アルバム）『わたしたちの源氏物語』『常用源氏物語要覧』『紫式部日記』（完訳日本の古典）『紫式部日記』（新編日本古典文学全集）『物語文学論攷』『うつほ物語の研究』『うつほ物語資料』『奈良絵本絵巻集』（15巻）ほか。

源氏物語みちしるべ

一九九七年三月一〇日初版第一刷発行

著者　中野幸一
発行者　秋庭　隆
発行所　小学館
〒101-01　東京都千代田区一ツ橋二の三の一
電話　編集　〇三-三二三〇-五六二〇
制作　〇三-三二三〇-五三三三
販売　〇三-三二三〇-五七三九
振替　〇〇一八〇-一-二〇〇
印刷所　図書印刷株式会社

●造本には十分注意しておりますが、万一、落丁・乱丁などの不良品がありましたらおとりかえいたします。小社、制作部あてにお送りください。
㊐〈日本複写権センター委託出版物〉
●本書の全部または一部を無断で複写（コピー）することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター（☎03-3401-2382）にご連絡ください。
©1997 Koichi Nakano
ISBN 4-09-362101-2　Printed in Japan

源氏物語みちしるべ

苏工业学院图书馆
藏书章

「花宴」　狩野祐清筆『源氏物語絵巻』

目次◉

はじめに 5

『源氏物語』の世界 …… 7

五十四帖のあらすじ …… 33

1 桐壺　2 帚木　3 空蟬　4 夕顔　5 若紫　6 末摘花
7 紅葉賀　8 花宴　9 葵　10 賢木　11 花散里　12 須磨
13 明石　14 澪標　15 蓬生　16 関屋　17 絵合　18 松風
19 薄雲　20 朝顔　21 乙女　22 玉鬘　23 初音　24 胡蝶
25 蛍　26 常夏　27 篝火　28 野分　29 行幸　30 藤袴
31 真木柱　32 梅枝　33 藤裏葉　34 若菜上　35 若菜下　36 柏木
37 横笛　38 鈴虫　39 夕霧　40 御法　41 幻（雲隠）　42 匂宮
43 紅梅　44 竹河　45 橋姫　46 椎本　47 総角　48 早蕨
49 宿木　50 東屋　51 浮舟　52 蜻蛉　53 手習　54 夢浮橋

名場面鑑賞 …… 95

物語の始発（桐壺） 96
車争い（葵） 105
紫のゆかり（若紫） 99
嵯峨野の秋（賢木） 110

須磨の浦波（須磨）　113
猫のいたずら（若菜上）　115
愛妻の死（御法）　121
宇治山荘の姫君たち（橋姫）　126
橘の小島（浮舟）　130
物語の終焉（夢浮橋）　134

登場人物群像 …… 139

葵の上　明石の君　浮舟　宇治の大君　宇治の中の君
空蟬　朧月夜の君　女三の宮　薫　柏木　末摘花
玉鬘　頭中将　匂の宮　花散里　光源氏　藤壺
紫の上　夕顔　夕霧　六条御息所

平安貴族の生活と風俗 …… 165

1 年中行事　166
2 通過儀礼　173
3 服飾と色目　178
4 季節と暦　183
5 方位と時刻　185
6 音楽と遊芸　188
7 信仰と俗信　197

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

紫式部の生涯 …… 207

1家系　2家族と家風　3娘時代と越前への旅
4結婚とそれ以前　5夫宣孝・娘賢子　6彰子中宮への出仕
7宮仕え生活　8『源氏物語』の執筆と晩年

『源氏物語』の読者と広がり …… 223

◉参考付表・付図 231

源氏物語年立　源氏物語年表　官位相当表
位禄表　国司位階表　源氏物語関係地図
平安京条坊図　坊・町(地割)図　平安京大内裏図
平安京内裏図　清涼殿図　寝殿造図

あとがき 254

口絵　『源氏物語絵巻』「柏木・第三段」国宝　徳川美術館蔵
『六条院女楽の図』『源氏物語絵巻』「桐壺」「澪標」「朝顔」
『源氏物語扇面画帖』「橋姫」『源氏物語櫃入　五十四帖
及び系図一帖』

装丁・レイアウト　舟橋菊男

はじめに

平安時代、物語は女性の心を慰めるものとされていました。物語の読者は、主として上流の姫君や宮仕えの女房や中流貴族の女性たちで、物語の中の女性にわが身をなぞらえたり、物語の貴公子にあこがれたりしながら読んでいました。上流の姫君たちは、乳母や侍女に物語を読ませながら、美しい物語絵を鑑賞したこともあったようです。

『源氏物語』も、そのような時代環境の中で創られ、女性たちに親しまれ読まれた物語でした。現代では、難しい古典としてとかく敬遠されがちですが、『源氏物語』は当時の女性たちが親しみ楽しんで読んだ物語であったということを、まず念頭においていただきたいと思います。

しかしながら、現代の私たちにとって、『源氏物語』が難解な古典であるということは、やはり否定できません。それは何よりも一千年もの時代の隔たりが、言語・思想・風俗・習慣・信仰など、生活上のすべての面で、現代とかなりの違いを生じているからです。『源氏物語』の長い研究の過程は、この時代の隔たりをできるだけ埋めるために、ひたすら努力を積み重ねてきたものといえるでしょう。

『源氏物語』が世界に誇るべき日本古典の大作であることは、だれもが知っていることですが、

なにぶんにもこの千年の隔たりのために、原典を読みこなすのは容易なことではありません。

本書は、この日本の誇るべき『源氏物語』が、現代の読者にも親しみ楽しんで読まれることを願って、物語の概要と読解鑑賞のために必要な基礎知識を一冊にまとめました。『源氏物語』の入門・必携の類は少なくありませんが、それらの中にはともすると専門的に過ぎたり、叙述が難しかったりして、かならずしも一般の理解に有効なものばかりではないようです。本書はその点を十分に配慮して、『源氏物語』の読解と鑑賞に必要な事柄を、適切にわかりやすく叙述することを心がけました。

本書が、これから『源氏物語』を読もうとされる方々や、いま読んでおられる方々をはじめとして、広く世の『源氏物語』の愛読者の好伴侶（はんりょ）となれば幸いです。

著　者

『源氏物語』の世界

「鈴虫」　住吉如慶画『源氏物語扇面画帖』

『源氏物語』とは

『源氏物語』は、十一世紀の初頭、平安時代中ごろに、一条天皇の中宮彰子（中宮は皇后と同格の后）に仕えた紫式部と呼ばれるひとりの宮廷女房によって創作された。それはいまからおよそ一千年ほど前のことで、世界的な文豪のダンテやシェークスピアが世に出るはるか以前のことである。

『源氏物語』は全部で五十四帖、物語の時代は、桐壺・朱雀・冷泉・今上（当代の天皇）の四代の治世七十余年にわたり、登場人物は四百数十人、このうち名のある主要人物だけでも優に五十人は超えるという、世界文芸史上でも有数の一大長編物語である。

これほどの大部な作品であるから、その内容を把握するのも容易ではない。そこでまず物語全体の構成の大略を巻名とともに示しておこう。

『源氏物語』の構成

[第一部]「桐壺」から「藤裏葉」までの三十三帖

光源氏の華やかな前半生

Ⅰ 青春の恋と憂愁

光源氏の生い立ちと青春の奔放な恋愛生活

Ⅱ 落魄から栄達へ

流離の後帰京して栄達する過程

Ⅲ こよなき栄華の日々

六条院の理想的な栄華の世界

[第一部]

Ⅰ

1 桐壺
2 帚木
3 空蟬
4 夕顔
5 若紫
6 末摘花
7 紅葉賀
8 花宴
9 葵
10 賢木
11 花散里

Ⅱ

12 須磨
13 明石
14 澪標
15 蓬生
16 関屋
17 絵合
18 松風
19 薄雲
20 朝顔
21 乙女

Ⅲ

22 玉鬘
23 初音
24 胡蝶
25 蛍
26 常夏
27 篝火
28 野分
29 行幸
30 藤袴
31 真木柱
32 梅枝
33 藤裏葉

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

［第二部］「若菜上」から「幻」までの八帖

光源氏の寂しい後半生

Ⅳ　罪の応報と孤愁の影

若き日の罪過の応報におののくわびしい晩年の生活

［第二部］

Ⅳ

34 若菜上　35 若菜下　36 柏木
37 横笛　38 鈴虫　39 夕霧（雲隠）
40 御法　41 幻

［第三部］「匂宮」から「夢浮橋」までの十三帖

光源氏亡き後の世界

Ⅴ　宿命の宇治の人々

薫の君・匂の宮と宇治の姫君たちの宿命的な恋愛

［第三部］

Ⅴ

42 匂宮　43 紅梅　44 竹河
45 橋姫　46 椎本　47 総角
48 早蕨　49 宿木　50 東屋
51 浮舟　52 蜻蛉　53 手習
54 夢浮橋

「橋姫」から「夢浮橋」《宇治十帖》

右のように、『源氏物語』の構成は、大きく三部に分けて考えるのが通説になっている。

第一部は、「桐壺」から「藤裏葉」までの三十三帖で、主として光源氏の華やかな前半生を描いた部分である。

この部分は、さらに物語の展開に即して、三つに分けることができる。すなわち、

Ⅰ　光源氏の生い立ちと、継母藤壺との過失を秘めつつ、正妻葵の上や紫の上をはじめ、空蟬・夕顔・末摘花・六条御息所・朧月夜・花散里等々の女性とのかかわりを描いた「桐壺」から「花散里」までの十一帖、

Ⅱ　政敵右大臣の姫君朧月夜との密会が露見し、よぎなく須磨に流謫して明石の君に出会い、やがて帰京して昇進栄達の道を歩む「須磨」から「乙女」までの十帖、

Ⅲ　四町に四季の庭を配した理想的な大邸宅六条院を造って愛妻たちを住まわせ、みずからは太上天皇に準ずるという特別な待遇を得て栄華の極みに達する「玉鬘」から「藤裏葉」までの十二帖である。

第二部は「若菜上」から「幻」までの八帖で、主として光源氏の晩年の孤独で寂しい心境に焦点を当てている。

朱雀院の皇女女三の宮の光源氏への降嫁は、結果として最愛の妻紫の上を病死に追いやり、またこの源氏晩年の若妻と柏木との不義は、遠い若き日の藤壺との罪の応報として源氏の胸に突きささり、いまさらながら因果の恐ろしさにおののくのである。

この第二部の物語は、富も地位も権勢も、すべてに理想をかちえた光源氏にして、なお応報の

恐ろしさに苦悩し続けなければならない姿を描いており、この第二部があるがゆえに『源氏物語』は、それまでの古物語を大きく超越したということができよう。

第三部は「匂宮」から「夢浮橋」までの十三帖で、光源氏薨後の世界の物語である。

このうちはじめの三帖は、光源氏亡き後の周囲の動静を語りつつ、以下に活躍する二人の貴公子、薫の君と匂の宮を紹介する。

「橋姫」から「夢浮橋」までの十帖は、古来「宇治十帖」と呼ばれる部分で、薫の君・匂の宮と宇治の大君・中の君・浮舟との恋愛物語が展開されるが、ことに薫の君の宿命は、光源氏の罪過のさらなる応報の物語となっている。

以上のようなスケールの大きな物語が、およそ一千年の昔に、二十代の女性によって生み出されたというだけでも驚異に値するが、さらにその内実においても高度な達成をとげているのであるから、まさに偉大な文学と称せざるをえない。

華麗な王朝貴族社会を舞台として、複雑な構想、多様な筋立てのもとに、多彩な登場人物が織りなす喜怒哀楽の人間模様を、きめの細かい筆致で、四季折々の美しい自然を背景に、しかも豊かな余情と深い陰影を揺曳しつつゆったりと描いていくさまは、まことに大河小説と呼ぶにふさわしいものがある。その間に、政治・経済・歴史・社会・教育・芸術・宗教等々の、およそ人の世のあらゆる問題を包含して、これに対する鋭い批評や深い観照を随所に披瀝しており、方法的にも、浪漫性と写実性、抒情性と叙事性、古代性と近代性、短編性と長編性など、対照背反する

文学的要素を貪欲なほどに含みこんでいる点は、この物語の独自の価値であろう。

まことに『源氏物語』は、愛と罪を主題として人の世のすべてを描き尽くした貴族社会の一大叙事詩なのである。『源氏物語』の作者紫式部は、一九六五年度のユネスコ世界偉人暦に、日本人としてはじめて選ばれ、ダンテやシェークスピアなどとともに顕彰されたが、これは『源氏物語』が国際的にも認められたあかしであろう。いまや『源氏物語』は、日本の誇る古典遺産であるばかりでなく、世界的にも偉大な文学として高い評価を得ているのである。

『源氏物語』の世界

[第一部]

I　青春の恋と憂愁

1 桐壺　2 帚木　3 空蟬　4 夕顔
5 若紫　6 末摘花　7 紅葉賀　8 花宴
9 葵　10 賢木　11 花散里

いづれの御時にか、女御、更衣あまたさぶらひたまひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めきたまふありけり。

（どの帝の御代であったろうか、女御や更衣たちが数多くお仕えしておられた中に、それほど貴い身分ではないお方で、たいへんに帝のご寵愛を受けておられるお方があった。）

『源氏物語』の首巻「桐壺」の巻は、まずある時代の宮廷の後宮世界の紹介から始まる。後宮とは宮中の奥に立ち並んでいる后妃方の御殿のことである。

この冒頭の書き出しは、それまで「今は昔」と語り出されることが多かった昔物語の読者たちには、きわめて新鮮に感じられたにちがいない。「今は昔」が物語の時代を漠然と遠い昔に設定しているのに対して、「いづれの御時にか」は、同じ昔のことながら、当代に連なる歴史上の過去の一時期を切り取っている点で、はるかに史実的である。しかもすでにおよその身分上のしきたりができ上がっている後宮社会の掟にさからって、有力な後見も持たない更衣が格別に帝の寵愛を受けていたというのであるから、事は穏やかではない。同じように皇妃方が競い合う当時の宮仕えの女房たちが、この後の物語の展開に人一倍の興味をそそられたであろうことは想像に難くない。『源氏物語』はこのように、冒頭の二、三行からして、読者が思わずひざを乗り出してくるような、波瀾を予想させる書き出しなのである。

案の定、桐壺の更衣は周囲の嫉妬を一身に受け、やがて三歳の皇子を遺して死んでいく。『源

氏物語』の主人公光源氏は、こうして読者の同情の中に登場してくる。彼は桐壺帝の第二皇子として、絶世の美貌と抜群の才能に恵まれたが、将来をおもんばかった帝の英断で、臣下の身分に下って源氏となり、元服の夜左大臣の娘葵の上と結婚する。源氏という姓は皇孫が賜る氏姓の一つである。

最愛の桐壺の更衣を失った帝は、更衣に生写しの先帝の皇女四の宮を入内させた。その宮中の居所が藤壺（飛香舎）なので、以後この女性は藤壺と呼ばれる。源氏は幼時から、この亡母に似ているといわれる継母の藤壺を慕い、藤壺も幼くして母を亡くした源氏を慈しんだ。若く美しい継母を慕う源氏の心は、長ずるに及んでいつしか恋慕の情に変わり、時の経過とともにいよいよ激しく燃えて、ついに禁忌を犯してしまう。この藤壺との秘すべき重い罪過を背負っての光源氏の多様な人生史が、『源氏物語』の主題であるといってもよいであろう。

以後、永遠の理想の女性藤壺の面影を求めて、若く多感な光源氏の女性遍歴が始まる。宮中の雨夜の宿直で、義兄の頭中将や侍臣たちから聞いた女性談義が、さらに彼の興味の対象を、中流の女性にまで押し広げた。老受領伊予介の後妻空蟬、五条の巷のはかない女性夕顔、藤壺の面影を宿す美少女若紫（のちの紫の上）、古風でみにくい故常陸宮の姫君末摘花、政敵右大臣鍾愛の六の君朧月夜、麗景殿の女御の妹の花散里、趣味豊かな貴婦人で前東宮妃の六条御息所等々、光源氏の奔放でひたむきな恋愛生活が続く。

やがて時勢が変わって、父桐壺帝が位を退き、弘徽殿の女御所生の朱雀帝が即位すると、政治

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com